

斐伊川住民意見発表会（松江会場） 発表者および発表主旨、配付資料

１．発表者

発表番号	お住まい	発表主旨、配付資料
１	雲南市木次町	P 2
２	松江市内中原町	P 3
３	松江市東朝日町	P 8
４	松江市末次本町	P 9
５	松江市和多見町	P 1 3
６	松江市西津田	P 1 7
７ (欠席)	松江市学園南	P 1 8

２．発表主旨・配付資料

各発表者の発表主旨および配付資料を次ページ以降に添付

発表者 1

私は尾原ダム直下流にて(約 500m)生活していますが、尾原ダム建設による水没地域住民の移転等により過疎化にさらに拍車がかかりました。

しかしながら尾原ダム建設による条件でインフラ整備はとても進んでいます。この地域のよさを見直し、又実感し何とか活性化につなげようと努力をしておりますが、なかなか特効薬が見つかりません……。そこでこの機会に流域住民の方たちと上下流交流を深め斐伊川治水の意義を再確認しあい尾原ダム周辺地域の活性化に多少なりとも役立ちたいと思っています。

「斐伊川住民意見発表会」への応募

1) 発表会への参加理由

私は宍道湖で恵みをもって成長してきた。子供のころの宍道湖は私にとって恵みをたくさん与えてくれた。

- ① プールの役目を果たして泳ぎを教えてくれた
- ② 食糧難のときの蛋白源はほとんど宍道湖のゴズ、シジミ、ナイス（ぼらの子）であった。命の恩人である。
- ③ 宍道湖の水質はすばらしくきれいであった

このような恵みの宍道湖を昔のように取り戻すためには、何かできることがあるのではないかと常に考えていた。

2) 宍道湖の水質が一番大切

斐伊川水域の整備で一番大切なことは水質を良くすることが一番大切であると感ずる。水質がよくなれば、多くの生物がすみ、環境がおのずからよくなる。水質改善が河川利用や他のもろもろのことの一番かなめであると思う

3) 水質改善の方法

水質改善は自然浄化が最高であるが、現在の宍道湖はその機能が失われている。原因は宍道湖のなぎさをすべてなくして、治水を優先にした結果であると感じる。なぎさをなくしたことが最大の欠点である。

自然浄化作用はなぎさが重要な作用をしている。

方法 1) 新しいなぎさを作る方法を考える

方法 2) よしの植物浄化能力を利用する けいかくてきに「よし」を植える作業が行われているのは大変よいことで今後も推進すべきであるが、

現在生えている「よし」を利用することが大切である。

方法 3) 今宍道湖水辺に生えている「よし」はあまり管理されないでそのまま自然の状態で放置されたままであるが、これでは植物の活動力が十分に発揮できない。管理が必要である。

方法 4) 「よし」の芽が出るときに多くの水を必要とする。太さ 1 センチの芽は 1 トンの水を浄化する。3 センチの芽は 5 トンの水を上を浄化するといわれている。

方法 5) 2 月ごろ「よし」の成長固体を「刈り取る」ことが新しい芽を作るために大切である。松江市民がボランティア精神で 2 月ごろ生えているものを「刈り取る」ことが重要である

以上の内容を市民に啓蒙活動したい。

「ヨシ」は宍道湖の水を浄化する 説明資料写真集



- ① 刈り込みして手入れした「ヨシ」
水辺は小さくぎっしり生えている。
草丈は2mくらい出揃っている。



- ② 刈り込み手入れしない「ヨシ」
水辺は枯れてまばら
草丈は3m～4mくらいでまばら



- ③ 理想的な「ヨシ」のある水辺 水辺は小さくぎっしり生えて水面の浄化
岸に行くにつれ太く高くなる。2mくらい。芽が水の浄化



④ 刈り込まないヨシの根本



⑤ 刈り込まないと枯れ芽が多くなる

⑥ 理想的な「ヨシ」の浜 手入れすると
このようにきれいになる。水辺は小さくぎっしり
これが水面を浄化する。岸に行くにつれ太く高く2m 水の浄化





⑦ ヨシの芽生えを邪魔する延縄の八ポースチロール破片



⑧ スチロール破片はこびりついて取れない



⑨ 刈り込まないと、水面浄化の小さい芽が出ない



⑩ 岸辺の大木はヨシの栄養をとるため浄化にはマイナス、考慮必要



⑪ ⑫ 矢道湖湖岸にこのような不必要な木が目立つ



発表者 3

◆水害の体験と治水対策の早期実施

朝日町は一人暮らしの人が非常に多く、平成18年の水害では床上浸水の人の
畳を上げて歩いた。二度とあのような思いはしたくない。

昭和47年にはさらに大きな被害をこうむっており、一刻も早い治水対策望む。

◆安全な交通網

朝日地区は、大橋川と天神川に挟まれており、大きな災害が起こり、もし南北
を結ぶ橋が落ちた場合、病院も救急車も無い地区である。

松江大橋や新大橋を架け替える場合、地震などの災害に強い橋を考えて欲しい。

発表者 4

平成 9 年に変わった新河川法を理解し河川法を守った、河川整備計画になるようにしてもらいたい。

新河川法にある環境や景観も大切にしたい、住民の意見を尊重した、河川整備計画になるようにしてもらいたい。

1000 人以上の方の意見を代表して河川整備計画に意見を述べたい。

大橋川改修事業は民主党が進める無駄な公共事業である。すぐに中止するべき。
理由1～8にまとめてみました。

- 1、費用対効果(B/C)の60倍以上の誤魔化し、島根総研理事長、山根治さんの発表では、2兆円との効果は誤魔化しであり、昭和47年の洪水の被害は今の物価に直して約300億円しかないのに、2兆円もの効果があると嘘をついている。昭和47年の洪水が66回起きないと2兆円の効果が出ないが、そんな馬鹿なことはありえない。詳しくは山根治ブログで検索「粉飾された2兆円」を読んで下さい。
- 2、ラムサール条約に登録されている両湖をつなぐ最も重要な場所である大橋川の自然環境を破壊します。絶滅危惧種が200種以上生息する世界的にも貴重な自然環境が拡張、掘削、コンクリートにより破壊されます。
- 3、日本一の水揚げ量のしじみも獲れなくなると言われています。塩分濃度の上昇や浅瀬の産卵場所を掘削してしまう為獲れなくなると言われています。
- 4、江戸時代から日本十二景(本邦十二景)として認められてきた、大橋周辺からの景観が破壊されます。
- 5、日本で三か所の国際文化観光都市の中心部を破壊してしまいます。
- 6、宍道湖は尾原ダムの約6個分の貯水力のある自然の巨大なダムの役割をして松江市を守っていますが、拡張すると自然のダムが効果が無くなります。(尾原ダムが3700万トン貯水できます。宍道湖は $(3-0.25) \times 79 \text{ km}^2 = 2 \text{ 億} 1 7 2 5 \text{ 万トン}$ 貯水できます。斐伊川放水路1億トン放水の二倍の能力です。)
- 7、拡張してもほとんど効果がない！！大橋川を何百億円の税金を使って拡張、掘削工事をしても、僅か20センチしか水位が下がらないと言う発表です。
代替案として何億円使わないで、20センチ堤防を高くすれば済みます。余裕高は宍道湖と同じ50センチにすれば、堤防も30センチ低く出来ます。平成19年の堤防の工事のような堤防を80センチ高くすれば、150年に一回の大雨に対応できます。費用も何千億円ではなく10億円もあれば足りります。

旧河川法と新河川法の違いを理解して計画をたてて下さい。

今会の議事録などを読むと、平成9年の新河川法を知らずに委員として発言しておられる方が、おられるように思いますが、新河川法との違いを良く理解して計画をたてて下さい。

旧河川法	新河川法（平成9年）
治水 利水	環境 住民参加 治水 利水
	新河川法の住民参加が今回の意見発表1回のみならずは新河川法違反ではなんでしょうか？
旧河川法	新河川法（平成9年）
河川整備基本方針 150年に一回の大雨に対する治水 ↓ 工事完成	河川整備基本方針 150年に一回の大雨に対する治水が最終目標 ↓ 河川整備計画 80年に1回の大雨を目標とした治水 20年～30年間で工事 ↓ 河川整備計画 20年～30年間で工事 ↓ 河川整備計画 20年～30年間で工事 ↓ 60年～90年かけて 150年に一回の大雨に対する治水計画完成

旧河川法では150年に一回の治水をすぐに出来るが、新河川法では段階的に工事をして行く事になっていきます。新河川法での河川整備計画では今回は80年に1回の大雨(昭和47年洪水)を目標に計画が作られます。昨年の技術検討懇談会では、昭和47年洪水の雨が降ってもダムと放水路があれば、治水は大幅しなくも問題ないと発表されています。今回の20年～30年間の計画では大幅するべきでは無いと思います。また、永年、大橋川まちづくり検討委員会で話し合われていたのは旧河川法での150年に一回の治水に対するまちづくりであり、何億円もの税金を使った住民を騙す新河川法違反な進め方だと思います。

斐伊川改修事業のデータについての質問

費用対効果同様に誤魔化しがあるのではないのでしょうか？以下は自分が計算したものです。

- 1、国土省の今回の計画では、斐伊川放水路に約1億トン放水し、尾原ダムに約3700万トン貯水して、その場合、宍道湖の水位は何もしない時は、3.68メートルで、放水路とダムにより宍道湖水位は、約1メートル水位がさがり2.68メートルになり大橋川拡幅により20センチ水位がさがり2.48メートルになるとの発表ですが、宍道湖は巨大なダムと言えそうですが、宍道湖から水が出る場所は大橋川と佐陀川のみで、出る量はほぼ変わらないので、

1億トン+3700万トン=1億3700万トン、が宍道湖ダムに入らない場合は

1億3700万トン÷79km²=1.73メートル水位が下がるのではないのでしょうか？

発表では1メートルしか水位が下がらないと言う発表ですが、本当は1.73メートルであったり仮に

1.2メートルであっても大橋川は拡幅しなくてもよくなりますが、どうでしょうか？

- 2、大橋川の流量についての質問(水位差の無い川を拡げても無意味では)

大橋川は宍道湖と中海の水位差がほとんどない為、東に流れたり西に流れたりしていますが、150年に一回の大洪水の時でも最大で1.2メートルしか宍道湖と中海の水位差がありません、30km以上離れた間で僅か最大1.2メートルしか水位差が無くて本当に拡幅して1600t/s流れるのでしょうか？

斐伊川放水路は同じ川幅で高低差が15メートルあり2000t/sです。

例えば47年洪水の時に、1週間も水が引かなかったと言う事は水が溢れなかった場合宍道湖水位は3.3メートルになっていたとの発表ですが、

(3.3メートル-1.7メートル)×79km²=1億2640万トン

1億2640万トン÷1週間(60×60×24×7)÷2=417トン/毎秒

47年洪水の時の流量は毎秒約400トン毎秒位ではないのでしょうか？

仮に1400トン/毎秒流れたならば、浸水は2日間で終わらないとおかしいです。

(12640万トン÷1400t/s÷3600s×2=約50時間)

- 3、新潟大学の熊元教授の言っておられた、全体のボリュームの計算式でも、

$$\begin{array}{rcl} 0.8 \times (1320 \text{ km} - 79 \text{ km}) \times 399 \text{ m} & = & 39612 \text{ 万トン} & (0.8 \text{ は流出量}) \\ \text{ダム} & = & -3700 \text{ 万トン} \\ \text{放水路 } 2000 \text{ t} \times 48 \text{ h} \div 2 & = & -17280 \text{ 万トン} \\ \text{宍道湖 } (2.5 - 0.25 - 0.399) 79 \text{ km} & = & -14622 \text{ 万トン} \\ \text{大橋川 } 1400 \text{ t} \times 48 \text{ h} \div 2 & = & -12096 \text{ 万トン} \\ \text{佐陀川 } 110 \text{ t} \times 48 \text{ h} \div 2 & = & -950 \text{ 万トン} \\ & & -9036 \text{ 万トン} \end{array}$$

以上は大熊先生の計算に当てはめたものですが、自分の考えは、

平成18年洪水の経験から出雲と松江では水位のピークは約8時間の時差がある事と48時間以降に流れて来る量と48時間後に放水路から流れる量もあるので48時間後の全体のボリュームに仮に0.7を掛けると27728万トンになり2億トンも水があまる計算になります。

座長の福岡先生には、計画が正しければ、以上の点を証明して頂たいです。

提 言

(H、21・10・2)

- 1、大橋川改修とは、あくまでも「治水」のための事業であって、「まちづくり」のための事業ではない。まちづくりを云々するのであれば、被災地のまちづくりを先ず検討すべきである。
- 2、大橋川の呑み口付近の開削は治水に逆行する愚策である。
～先人の叡智に学ぶべきである～
- 3、昭和47年水害を受けて国交省（旧建設省）河川局の定めた「斐伊川水系工事実施基本計画」（昭和51年7月策定）は妥当なものであり、両湖岸堤の整備や内水対策、高水敷整備、河道整備としての天神川等の汚泥除去など、やり残していることを施工するのが先決であり、大橋川上流部拡幅を前提とした「まちづくり」を優先させようとするのは本末転倒の暴挙である。
※「河川法」付則 第2条 第2項 を遵守すべきである。
- 4、関係地区住民に正確な情報を伝達し、また住民のもつ情報にしっかり耳を傾け、行政側と住民の信頼関係を構築しなければ、何事も進展しないでしょう。

提言《先人の英知を無にしてはならぬ》

斐伊川上流部でダムを築くのは何のためですか？ 中流部で放水路を設けるのは何のためですか？いずれも下流部への洪水の流速量を減ずるための措置である。

では、宍道湖の東岸に位置する白瀉地区では当然のことながら湖岸堤を整備（これだけは既にできている）して下流部への流速量をできるだけ抑えて流すのが治水対策の常道であり、

先人は城下や下流部への配慮をし、それに心がけてきたのである。それゆえに、斐伊川東流以来約400年、幾度の水害を受けてこよとも大橋川や天神川（特に上流部）は狭めることはあっても拡げようとはしてこなかったのであり、宍道湖で一端プールして幾分かでも日本海に直接放流する策（佐陀川の開削）を採ってきたのである。すなわち、私たちの祖先が水害から守るために築き上げてきた土地を治水に逆行する（大義に反する＝下流部の浸水被害の可能性を高める）ような開削計画（＝まちこわし）に協力せよとは無謀な要請である。

（理不尽な要請には応じるわけにはいかぬ）

《参考》

- ・1608年の初代松江大橋＝約84間（約151m）…斐伊川大社湾に注いでいた。
 - ・1635年 斐伊川の主流が宍道湖に注ぎ始める。～以来 松江は度々水害を受ける～
 - ・「松江の渡り」を狭めて土手を築き「新川」や「新土手」と言った。（今の天神川）
 - ・18世紀半 天神橋の長さ＝34間（約61m）……今はその半分もない。
 - ・特に元文3年（1738年）の大橋の改架にあたっては末次側で石垣を5間前に出したという記録がある。（要津大橋）…『出雲録』（騷漫）「松江並東西水邊圖」等による。
 - ・宍道湖北岸には「洗隈土手」を築き、そして佐陀川（放水路）の開削をしている。（1785年）
 - ・19世紀初 伊能忠敬が測量した大橋＝74間2尺（約133.5m）…約20m短かい
- ～即ち、下流部を洪水から守るため湖河岸の地上げをし、川幅は狭めてきたことがわかる～
～佐陀川開削後、明治26年（1893年）まで 約100年 大洪水の記録は見当たらない～

にもかかわらず、大橋川の呑み口付近の川幅を20mも拡げ、洪水の流速量を増やそうとしているのである。それは、大橋川の水位上昇を速め、松江駅辺りや寺町等の浸水被害を増大させる可能性が高くなる。大橋川は増水時であっても上げ潮の時は流下せず、西流＝逆流する。河岸堤を高くし、排水口からの逆流防止策をとったとしても地元での雨水（内水）の排水が一層困難となるからであり、それは橋北部にとっても同様である。

さらに下流の朝酌川・剣先川・天神川・馬橋川との合流地点（朝酌、東津田地区）の状況からして同地点でつき水となり、上げ潮（大潮）と重なれば本川の逆流が始まるのである。

～ 別紙参照 ～

従って、宍道湖から大橋川に流れ込む水量（流速量）は可能な限り抑えるようにしなければならぬのであり、大橋川の呑口付近を開削するのは避けなければならぬことである。

～白瀉は松江の治水上の生命線である。～

《参考》 本年7月19日 大雨洪水警報が出たときの実態

- 松江大橋宍道湖側の水位 TP 100cm 新大橋東側の水位 TP 80cm
- 流れは夕刻まで東流、深夜 11時半頃一両所の水位は変わらないが流れは停止状態
- ※ 潮汐学の常識として 上げ潮と下げ潮の間隔は平均して12時間と言われており、大橋川の場合、下げ潮のときしか流下せず、その中間時点では流れが停止するのであり、やがて逆流に転じる。また低気圧のときは潮位が高くなるのが一般的である。

また、S47年水害でさえも宍道湖東部の湖岸堤は越水まではしておらず、ダムと放水路が機能すれば宍道湖の水位は低下し、松江大橋の橋梁を高くして改架する必要もない。

先人の工夫や出雲市民の犠牲（貢献）を台無しにしかねないことは避けなければならぬ。

即ち、白濁の大橋川沿川に住まいしたり、営業活動を営む人々は治水に貢献してきたのであって、治水の妨げになってきたのではない。「まちづくり」を云々するのであれば、浸水被害を受けやすい所のまちづくり(内水対策)を第一に考えるべきであり、浸水被害を受けたことのない町を中心としたまちづくりを優先的に取り上げるのは誤りである。

つまり、S, 47年の大水害の後、S, 51年に国が策定した

「斐伊川水系工事实施基本計画」は妥当なものであったことになる。それには「大橋川改修」や所謂「三点セット」の文言はない。

同計画書の文面は下記の通りである。

『……しばしば水害の発生している地域についての対策を重点として、次のように工事を実施するものとする。

保全に関しては、出雲市、平田市、松江市、安来市、米子市、境港市等の沿川地域を洪水から防御するため、上流部にダムを建設し、洪水調節を行ない、河道については、掘削、築堤、護岸等を施行するとともに中流部に放水路を開削して洪水の軽減を図り、宍道湖及び中海については、湖岸堤を設置する。

また、内水被害の著しい地域については、内水対策を実施し、河川環境の改善を図るため、松江市等については、高水敷の整備及び汚濁対策を実施する。……』

《参考》

「河川法」付則 第2条第2項には

『…河川整備計画が定められるまでの間においては、……旧法の「工事实施基本計画」の一部を……「河川整備計画」とみなす。』とある。

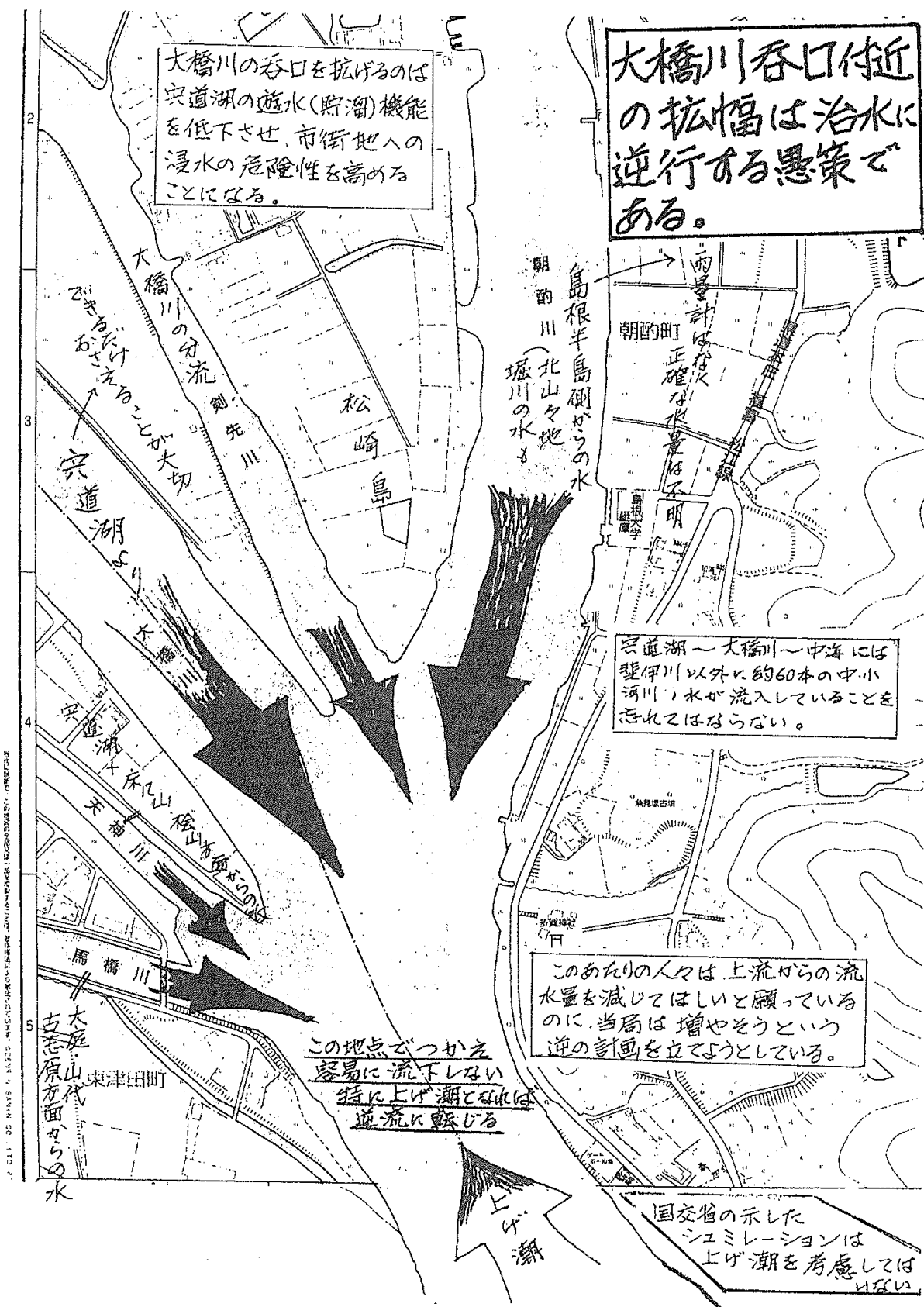
従って、前計画で施工しておかなければならなかったことは、中海の護岸整備や内水対策・高水敷整備・天神川などの浚渫であって、大橋川改修(=拡幅)ではない。同川については河岸の補修整備に留め、普段からの観測態勢の充実に努めて確かなデータの把握をして長期的展望に立った適正な計画を立てるのが法治国家として当然の責務であろう。

昭和39年や昭和47年の水害はどうした時に発生しているのかよく調査してみるべきであろう。同じような過ちを侵してはならぬ。

懸案となっている「**内水対策**」については平成15年に制定された「**特定都市河川浸水被害対策法**」を活かし、貯留浸透施設・排水ポンプの設置や雨水用の下水道整備等を推進すべきであろうし、遊水地や遊水池の確保(復元)も欠かせないことである。

何よりも大切なのは、既存施設の保守点検・整備(汚泥の除去など)である。

◎「環境」「景観」「まちづくり」問題については、改めて文書で別に提言します。



大橋川の呑口を拡げるのは
空道湖の遊水(貯溜)機能を
低下させ、市街地への
浸水の危険性を高める
ことになる。

大橋川呑口付近
の拡幅は治水に
逆行する愚策で
ある。

空道湖～大橋川～中海には
斐伊川以外に約60本の中小
河川、水が流入していることを
忘れてはならない。

このあたりの人々は上流からの流
水量を減らしてほしいと願っている
のに、当局は増やそうという
逆の計画を立てようとしている。

国交省の示した
シミュレーションは
上げ潮を考慮しては
いない

この地点でつかえ
容易に流下しない
特に上げ潮とすれば
逆流に転じる

古志原山代
東津田町
馬橋川
大庭山代
古志原山代
方面からの水

車の渋滞と同様に考えれば一目瞭然である。
(下ってくるのは軽量車、上ってくるのは重量車)

発表者 6

「斐伊川の河川整備」についての意見です。

△行政のあり方について

- ・行政は、地域住民に安全・安心を提供するのが一番の役目だと思います。
- ・松浦市長さんが大橋川通信 28号で、松江市内は低湿地帯が多いので、内水対策が急務だと述べられています。それは、昭和47年と平成18年に水害が起きているのに、平成21年の現在も対策が不十分だということの意味すると思います。住民にとっては、まず急務なことをしてもらいたいものです。
- ・市場経済の求めるままに、宅地申請を許可していく行政のあり方にも問題があると思います。

△国のあり方について

- ・過去において中海、宍道湖の淡水化と干拓事業を止めた経験があります。
当時、何故、淡水化と干拓が必要なのかということよりも、公共事業的な結論ありきの説明で事業が進められてきたという印象を多くの人を持っているのではないのでしょうか。
- ・国は、住民に意見を聞くことや情報提供する考えを本当に持っているのでしょうか。疑問に思っています。
ただ意見を聞くだけの体裁を整えているような感じを受けます。
- ・他の色々な説明会でも、結論ありきの説明会という雰囲気を感じてしまいます。

△3点セットについて

- ・現在は、良く住民の意見集約や情報提供と言われますが、ダム及び放水路建設時に何故3点セットならば大橋川整備についても、斐伊川流域の全住民にその是非を問いかねなかったのですか。
- ・おそらく大部分の松江市民は、昨今になって大橋川整備の段階になってから初めて3点セットの存在を知ったのではないのでしょうか。
- ・しかし、過去の経緯を知れば、奥出雲、雲南、出雲の人達にとっては、今さら大橋川整備について話し合うことさへ腹立しいことだと思います。

△これから市民はどうしたら良いのだろうか。

- ①これからの市民は、賢くないと生きていけないし、快適な地域の生活環境は得られないと思います。
 - ・国や行政に任せ切るのではなく、関係する地域住民が直接話し合うぐらいのことが出来なかったら、所詮最後はいつも国や行政に誘導されてしまうのではないのでしょうか。
 - ・インターネットの時代、自分達が暮らしている足元のことですから、若者が動いてみませんか。
- ②宍道湖七珍が戻るように、水質や自然環境、大橋川周辺の景観や治水等が、現状よりも良くなるように、松浦市長さんが言われる市民と行政の「協働」の精神で、お金、汗、アイデアを惜しまないことだと思います。
 - ・治水が一番ですが、既に何十年前に決まっていることだからという発想ならば工事は止めるべきです。
安上がりコンクリートで護岸や堤防を築いても景観や水質は悪くなる一方です。自然環境悪化の中でコンクリートに囲まれて暮らすというのも変なものです。一例として、護岸や堤防に「来待石」を使う等の工夫をすれば、水質にも良いし新しい素敵な景観が創出されると思います。

△最後に

- ・お城として全国で2番目の価値がある松江城の国宝認定への市民活動がありますが、お城ばかりではなく、町全体を含めた、また宍道湖も含めて世界遺産に登録するような気概と誇りをもってすれば、この大橋川整備計画はきっと未来の人達に胸を張れるものが出ると思うのですが、どうでしょうか。
- ・余談ですが、市中の道路拡張等によって、松江らしいたたずまいが壊されていくのを残念に思っている者の一人です。

[以上]

「大橋川改修事業の早期実現」

私が住んで居ります、追子団地は「くにびきメッセ」の東側に位置します。南に剣先川があり、堤防道路の法面は「むき出しの土」であり漁船がたてる波から葦がかるうじて守っている状態で、地盤が低く水害を受けやすい地区であります。

昭和47年の大水害は、床上30センチの被害を受け、出雲部で大雨の注意報・警報が発表されるたび剣先川の水位を確認しなければ安心して生活をする事ができない所です。

H18年一昨年の水害の際は、11世帯が床下浸水の被害を受け、道路は冠水し、高齢者は歩行して避難することは出来ませんし、車の通行も不能でした。土のうを作る土も袋も無く、水は容赦なく堤防道路を越えて流れ込みました。

私も職業から40数年間、島根県下の各災害現場に先遣し、我が身を省みる余裕もなく濁流に孤立した人、二次災害の虞を前に被災者の救出・救助活動、また生き埋めになられた行方不明者の捜索、被災家屋の物品の搬出に携わってきた体験があります。

天災は、時・所・規模を選ばず突然襲ってきます。

防げる天災は未然に防ぐ、これがまさに斐伊川水系の抜本的な治水工事でありましょう。

川上ではダム建設、川中では放水路建設、川下では矢田地区の移転と、地域の皆さんが物心両面の多大な犠牲を伴ったご協力によって工事が進められてきています。

これも松江市民の生命と財産を守るためにとのことからです。この方々の貴い犠牲と協力に感謝の気持ちで一杯であります。

しかるに「ダムが出来、放水路が出来れば、松江は大丈夫だ。大橋川改修は不要。」と詭弁を弄する輩がいます。

観光客誘致も大切、景観、美観も大切でありましょう。

しかし今の松江は、ビルやマンションが容赦なく建設されております。

一番大切なことは、そこに住む人が安全で安心な生活が営める所であります。

松江市は、県庁所在地として全国でも唯一原子力発電所があり、一朝有事の際には、老朽化した橋は落橋し、老若男女は大橋川を泳いで避難すればいいのでしょうか。この機会に堅牢で美しい橋に架け替えて頂きたいものとお願ひするものです。

また、少子高齢化・過疎化が進行する現状では、生活困窮者・年金生活者にとって水害により被害を受ければ生活が破壊します。

この国の発展に努力された高齢者に後顧の憂いなく、安全で安心な生活が出来るよう、更には次世代がこのふるさとに帰り家族と幸せな生活を営み、地域社会を通してこの「美しい国日本」の発展に寄与できるよう乞い願ひするものであります。

行政当局におかれましては難問山積の中、崇高な使命感と絶大な自信を持って、この事業を協力を推進されますよう切にお願い申し上げます。

【追加】

大橋川の中でも水害の危険度の高い追子団地から、大橋川改修のモデル事業として早急に着手いただきたいと考えている。